

Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより 第45回

会所の前に勢揃いした本郷町の
屋台と錦杖を手にする子どもたち



宇都宮二荒山祭典 (本郷町)

菊水祭の起こりは、江戸時代の初め一六七二(寛文十二)年に遡る。言い伝えによれば、「その年の冬、日野町で大火事が起こった。折からの強風にあおられ火勢が増し、曲師町まで火の手が及ぼうとした際、二荒山神社に鎮火を祈願したところ不思議に炎は衰え類焼から免れた。これに感謝した町の人々が冬渡祭と春渡祭の時に、児子唐人踊りを奉納するようになった」とあり、のちに「おたりや



菊水祭の鳳輦渡御

菊水祭

「菊水祭」は、宇都宮の秋の風物詩。二荒山神社の大祭「秋山祭」の付け祭として二六七三(延宝元)年から今日まで、五百有余年も続く祭礼である。毎年十月末の両日、上町と下町とを二日にわけて真つ赤な天狗の面をかぶり高下駄を履いた猿田彦を先頭に、古式豊かな衣装をまとった神官、棒に菅笠をかぶった市内五十町の代表者、そして流鏑馬の射手を従えた鳳輦渡御が行わ

れる。付け祭りとは、本祭にあわせて行う祭りのことで、屋台、お囃子、踊りなど余興を指す。一九三四(昭和九)年ごろには、市内に各町から出車、屋台二十数が繰り出し活況を極めたという。絵葉書に映る出車がそれである。



宇都宮市馬町伝出したに繰り出た祭菊水

千両、お祭り万両」といわれるほどの盛大な祭りとなった。しかし、冬渡祭、春渡祭があまりもの人出で混雑するため踊り奉納を十月に移したのが今の始まりであるという。

また、祭礼二日目には大鳥居がある境内参道で、走る馬上から弓矢で的を射抜く勇壮な流鏑馬が奉納される。

屋台馬伝出に繰り出した祭菊水